あさ 9

2023

一葵壺

亀田虎童子

片眼づつ病んで両眼秋ひでり

鳥籠にたいくつな鳥敬老日

退屈な日を退屈に種なすび

鴨よりもおもしろかりしかいつぶり

ぶだう吸ふ男の顔をととのへて

（『百里』『雷魚』より）

あを

九月集

一蚕壺2

佐藤　竹僊

朝顔の苗に育ちぬ蔓うごく

出はじめの藜はうすくけはひをり

雨やどりしたくて梅雨の晴間かな

六月の竹林水に入るごとし

兩國にまあまあまあとところてん

晴れてきた出水の上で羽づくろひ

青から黄出水に立てる信号機

日盛りで月命日でリハビリに

しばらくは窓をそのまま夏の雨

夏の山入れても見えぬ遠めがね

ゴミ提げて朝のあいさつもう暑い

空堀に落葉がうごく四日かな

妻はまた鴉を詠めり初句會

ひと枝の初花どうしうなづきあふ

先客の鴉うごかず初ざくら

老といふ便利な道具春爛漫

雑詠

都築繁子

紫陽花の錆びて知人の長話

ミニトマトの青き実いとし水を撒く

四年ぶり夏のイベント戻りけり

盆踊り櫓見下ろす茜雲

三年日記半ば過ぎたり半夏生

解体のふるさと思ふ遠花火

決勝戦の球児の気迫暑き夏

梅雨

長崎桂子

朝曇り一雨あるか枇杷食べる
梅雨はげし時に静まり安心す
警報や駆足の帰宅に汗ばむ
溽暑つづくや飲食にあれこれと
菜食の日々疲れたり蝦蛄ゆでる
活気みつ大相撲名古屋場所満員
梅雨明のテレビニュースやうれしかな
七月や田んぼアートの映える町
家並のカサブランカや人目引く
向日葵畑広し戦禍の地の悲し

梅雨の晴れ

森なほ子

星涼しジュラ紀白亜紀遥かなり
恐竜の化石静もる緑雨かな
さりげなく席譲る人青水無月
青田列島離れぬ線状降水帯
茅の輪無き社なれども梅雨の晴れ
ハモニカ横丁ぶらぶら歩く沖縄忌
横向いた頃に風来る扇風機
そんな気はちっともないのさくらんぼ

月涼し

赤座典子

関越道灼けて四十一度かな
さるすべり真紅に怒り込めてをり
朝涼や新幹線のゆるゆると
朝のビュッフェ水羊羹の存在感
頼しき子の食欲や夏座敷
サイダーを欠さず友の食前酒
薬より寝莫産頼りし母のこと
新じゃがを無心に炒りて照りと焦げ
屋上にテーブルと椅子月涼し
大荒れの花綵列島秋を待つ

酔芙蓉

秋川泉

どぶ川の鰻さらへと囃す子ら
子ら集ひ泥足すすぐ日向水
高僧の氷菓づくしの誕生日
晴天の歯を抜く日にも冷索麺
腹響く雷の迫りて風呂嫌ひ
夜も更けて守宮とゆるり話し込む
来し方を誰に語らむ雲の峰
仏飯と供へる桃は極早生種
夏椿訪ふ人の好まれし
主なき庭に楚々たる酔芙蓉

青田

七郎衛門吉保

安全と云はれ廃液夏の海
蜻蛉生む好みの微温源泉池
夕日背にスターマインの海花火
土用東風はこぶ音頭と桴の音
田水抜け尺を越へたり青田面
残鶯に押され坂道山の湯に
球児にはボール一個の夏野かな
子子死す蹲踞の水反射なく
熱暑の日休業札も干涸びて
急な雷傘の代役エコバッグ

白

篠田純子

鬼灯の花は白なり母とゐて
坂の町百日紅の白ばかり
初蝉や仔犬を連れて夫婦らし
薄めし水白か黒かと蝉時雨
ヤクルトレディーの空調服の音やさし
診断は経過観察片白草

暗渠

篠田大佳

七夕や暗渠の上の図書館に
釣竿に糠雨のさす川蜻蛉
炭酸の泡は天へと上る夏
エスカレーター涼しき地下へ前のめり
鳴く蝉は人に見られて羞恥心
レーダー予報が夕立告げて翔ぶ烏
夕焼や最後の旅を助く医師
ファンジャケット電池の切れてしづかなり

猛暑の日

須賀敏子

朝顔の花を見たくて早起きに
紫の花に夏蝶小半時
造られし滝といへども涼味あり
壊しても壊しても蟻土を盛る
金柑の白く小さな花並ぶ
さっと来て桃一箱の置土産
猛暑日の続く今年や七月尽

炑收集

芦千本葭切一羽かくまへり　亀田虎童子

¤

しばらくは海を流れて雪解川　佐藤　竹僊

公園のその捩花は抜かないで　須賀敏子

めまとひを払ひて富士の御中道

老鶯の長き美声に励まされ

通院の足を伸ばせば菖蒲園

カーペット外し畳の夏来る

コロナ後の四人の集ひ夏料理　都築　繁子

茅の輪くぐり異国の人も楽しさう

早朝の町の掃除や梅雨晴間　長崎　桂子

梅雨ふかし夫の好みし白檀香

黒姫山（くろひめ）は雲とたはむれ夏はじめ　森　なほ子

夕刊の二時半に来る青時雨　赤座　典子

山菜のたたきのとろみ梅雨に入る

眠気差すおきどころなき夏の風邪　秋川　泉

庭に蟇道に出るなと云ひ聞かす　七郎衛門吉保

ビル解体燕の巣立急がねば　篠田純子

空也上人のアキレス腱の清々し

羽田行の機影外苑通過梅雨　篠田大佳

薫風やいまだ名の無きうたごころ

喜孝抄

七月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

昼酒の昼幽かりし醉芙蓉　　亀田虎童子

酒は日が暮れてから頂くもの、庶民は大方さう思ってゐる。偶にさう、仕事をしなくともよい日曜日や、祝ひ事では大っぴらに昼酒を楽しむことができる。虎童子さんも何かの折に昼酒へ手を伸ばす。飲みたくて酒を手を伸ばしたのだが心のどこかに屈折を覚えた。そのやうときを「昼幽し」と詠まれた。ふと目にした庭の酔芙蓉はその時どんな色をしてゐたのだろうか。酒と酔芙蓉、季語が付きすぎてゐると云はれればさうだが、名手にかかるとなるほどと納得。

酔芙蓉といえば田中藤穂さんにいただく約束をしていたのだが、時機を外してしまった。心の残りなことである。（喜孝）

昼酒の時間、昼を感じる時間が少ないという意と読みました。昼酒の後、酔芙蓉のように火照った頭を夕方の風に晒して、酔いを覚ます様子を想像します。酔芙蓉の「酔」の字に目が回りそうです（大佳）

長生きをせよと放せり甲虫　　亀田虎童子

長生きしろよとしみじみ甲虫に話しかけておられます。頑丈そうな甲虫の寿命は、例外もあるが、

成虫で約二か月らしい。幼虫の頃を入れると一年ちょっと。作者の亀田先生は大正末のお生まれだそうで、百歳目前の御長寿であられます。甲虫と並べて書いては恐れ多いのですが……。（なほ子）

沈黙の春に咲きたる銀木犀　　佐藤竹僊

「沈黙」という言葉が、社会にとって大きな意味を持ち始めています。話すことが大事だとわかっていても、話し方がわからない。季節外れに咲く銀木犀は、何かを言いたいけれど、何を言っていいかわからない人間社会と重なって、沈黙を以て春の如何を語っています。（大佳）

素麺を茹でる菜箸妻の焦げ　　佐藤竹僊

先生には珍しい？単刀直入な句ですが、分かりやすいからといって浅いという訳では勿論ない。この句はひねりも飛躍もないが、日常の些細なもの「菜箸の焦げ」、奥様がこの世に残された確かな痕跡があります。それを見つけた時の感慨をそのまま詠まれたのでしょう。真白な素麺をかき混ぜる菜箸の焦げが鮮やかに浮かびます。（なほ子）

別辞残る初夏の廃墟のレストラン　　篠田大佳

廃墟となった古いビル。その一階にあるレストラン。その入り口の扉に一枚の貼り紙が。と、ズームしてゆく。貼られて久しいらしく、文字も薄れて「閉店のご挨拶」と。映画を観ているようだ。「初

夏」故に無残な廃墟が際立っています。（なほ子）

¤

それは春もをはり輝かしい命弾む夏が訪れた頃の事だった。今、さうたった今別れた人の言葉が頭の中で渦巻いてゐる。廻りを見ると、そこは宮殿のやうに足を踏み入れたレストランだ。それが今は廃墟にしか私には見えない。

掲句から勝手に物語を作ってしまった。（喜孝）

目標は早寝早起き新茶汲む　　須賀敏子

今月の作者の句に「新聞を洩れなく読んで夜のつまる」もあり、かなりの宵っ張りでおられます。それでも目標は早寝早起きなのですね。「新茶汲む」までを目標にしても面白い。私も宵っ張りですが、今更変われないと思っています。早寝の方が健康に良いとわかってはいるのですが……。（なほ子）

来年も此処で咲いてよ桜草　　須賀敏子

優しい句である。足元に咲いてゐる桜草に声にならぬ言葉をかけてゐる。もちろん私も元気で一年を過ごすから、あなたもしっかり咲いてくださいねと。（喜孝）

窓みどり文豪好みの万年筆　　都築繁子

文豪は漱石？鴎外？と想像するのも楽しい。その机上に、数々の名作を綴った万年筆が静かに

置かれている。時が止まった空間。窓一杯の青葉が文豪の疲れた眼を癒したことでしょう。（なほ子）

荒川線に沿ひで彩る薔薇の花　　都築繁子

荒川線は情緒あふれる路線である。私も用もないのに荒川線に乗りに行った。だが、まだ全線踏破してゐない。時季によって沿線をいろいろ彩る花は紫陽花であったり薔薇であったりと変化を楽しめる。これも沿線の人々の心遣いであらう。（喜孝）

葉桜の堤防ゆるりゆるり行く　　長崎桂子

作者の句にお馴染みの桜並木の堤防も、今は葉桜になっています。その堤防は作者のお住まいの近くで、いつもの散歩コースなのでしょうね。お会いしたことはないが、葉桜の木陰をゆるりと歩いておられる作者の姿を想像して見ました。「ゆるりゆるりゆく」と「ゆ」の繰り返しが心地よいです。（なほ子）

原っぱの草は元気や花五色　　長崎桂子

作者は直截に浮かんだ言葉をぶつけてくる。言葉選びはストレート、変化球は投げない。だからか素直に作者の言はんとすることが伝ってくる。私には夏の原っぱが浮かんでくるが、そこは一歩下がって、「原っぱの夏草元気花五色」としてはいかがか。（喜孝）

子雀の着地の脚を崩しけり　　森なほ子

子雀が独り立ちのために飛ぶ訓練をしているところでしょうか。足取りは未だたどたどしく、着地も上手くいっていないようです。力の掛け具合を誤って、すっと脚の力が抜ける感覚は、成長を見守る意識に加えて、妙な小気味良さを感じます。（大佳）

蝋石の欠片どこかに春の闇　　森なほ子

いまの子はいざ知らず、昔日の東京の子供は道路が遊び場だった。戦後、土がむき出しになった道では、蝋石の出番はなかったが、いつか湯気の出たアスハルトで道が覆はれる。やっと蝋石の出番である。作者は往時を偲んでゐる。あの日の蝋石のかけらが、どこかにあるやうな気のする春の闇が作者をつつんでゐる。（喜孝）

蘖に思ひをたくす風来坊　　渡辺京子

様式美から外れたもの同士への共感を読みます。風来坊の「俺もはみ出し者なんだ、世間は俺を馬鹿にするが、そんな俺だから見えるものもあるんだ、なあそうだろう」という独白を想像して、胸の中が締め付けられる思いがします。（大佳）

登山靴ここは我が場所松落葉　　渡辺京子

登山は夏の季語、松落葉も夏の季語。

日常の私から抜け出すために山に登る。其処は何度も来た所かもしれません。「松落葉」の「落葉」に拘ることはないやうだ。松も登山では椴松や偃松の方が似合ふ。下五一考。（喜孝）

島めぐるサイクリストに夏の雲　　赤座典子

長い橋を自転車で渡る時に、雲の峰とも言われる夏の雲が立ち上り、空高くまで覆っている光景を想像します。不思議と雲の国へ誘われているような心持ちで、自転車のペダルも軽やかです。（大佳）

濠沿ひの坊ちゃん列車風薫る　　赤座典子

旅吟の良し悪しは作者がその旅をどれだけ楽しまれてゐるかに懸るのかも。四国に行ったことはないが映像で見ると、私も「坊ちゃん列車」に乗ってみたくなった。いや見てみたくなる列車だ。「風薫る」に作者の旅の喜びがよく表されてゐる。（喜孝）

分蜂の蜂は僧侶をかすめをり　　秋川　泉

「分蜂」は蜂の巣を分けて新たな巣を作ること、引っ越しに忙しい蜂というところでしょうか。僧侶の住宅事情も色々想像されますが、直感的に定住の住職を想像してしまいました。動きのあ

る蜂と動きのない住職の対比が小気味良いリズムで描かれているという読みをします。（大佳）

小雨なか炎は高く薪能　　秋川　泉

能を観劇した機会は数少ない。一度は芝尚子さんの能の先生の上演に招待された。蝋燭の明りで上演する蝋燭能だった。作者は今月薪能の句を二句発表されてゐる。「烏しづまり」「炎は高く」と薪能への緊張感、感動が伝はってきた。（喜孝）

忘れない「平和」憲法記念の日　　七郎衛門吉保

憲法記念の日の新聞の見出しが徐々に変化して、「平和」という文字が少しずつ小さくなっています。「平和」が街じゅうに溢れていた二十世紀後半と異なって、平和への希求が一層強く求められる時代になっています。作者の決意の強さを掲句に見ます。（大佳）

用水を黒々満たし田植待ち　　七郎衛門吉保

田植前、田植の水がたっぷりと用意されてゐる。その水を「黒々満たし」と見た。とある時、ある角度で水が黒く見える事は確かにある。それを詠み、読み手の意識にありありと存在させた。見事なものである。「黒々満たし」には生命力をも感じる。

農事に事は全く知らない。「用水」に不満はないのだが、「ため池」ではと思った。（喜孝）

鳳輦の將門怖し拝みけり　　篠田純子

平将門公は日本三大怨霊の一と数えられています。神田明神は、将門公を鬼門に祀り、江戸東京の守護に用いていました。作者は、世の中の乱れと重ねたのでしょうか、鳳輦の将門公は一層迫力があって、恐ろしさを感じたようです。世が鎮まることを願う作者の気持ちを読みました。（大佳）

ちんどんのクラリネットや付け祭　　篠田純子

ある句会のお世話をしてゐた時、遅くなるからと八田木枯さんが電話で投句をしてこられた。ちんどん屋の句であった。敬愛する木枯さんにあやかりたいとちんどん屋の句を私も作って投句した。昨年クリスマス商戦の頃珍しくちんどん屋に出合った。いくつか作ったが皆「ちんどん屋」である。

掲句は「チンドン」、純子さんは日常で「チンドン」と言ってゐるのだらう。私には言へなかった。この云ひ方を早く知ればよかった。祭にチンドンが参加するとは！。付け祭は「江戸時代、日枝神社・神田明神などの祭礼に、町々からの山車のほかに余興として引き出す踊り屋台。その上で娘や子供に手踊りなどをさせた。」あり納得。「付け祭」の俳句少し調べたがなかった。付け祭とクラリネットの取り合せに興を覚えた。感心した。（喜孝）

渡る

鉄線の花ひたひたと風渡る　佐藤　恭子
風渡る植田の波に深呼吸　赤座　典子
あはあはと白鷺渡る遠植田　森　理和
虹渡るエホバの孤独人知らず　芝　尚子
五人ずつ渡る吊橋初嵐　東　亜未
風渡る更地に白のヒヤシンス　森山のりこ
谷渡る夏うぐひすの舌かろし　早崎　泰江
蛇渡る棗のやうな頭あげ　鎌倉喜久恵
母衣蚊帳に母子の寝息風渡る　鎌倉喜久恵
ひだりから右の窓へと月渡る　田中　藤穂
川の瀬を煙の渡る野焼かな　鎌倉喜久恵
月渡る泰山木を煌めかせ　東　亜未
心地よき風渡る日や種を採る　田中　藤穂
荒川を渡る電車や日脚伸ぶ　長崎　桂子
花冷や渡る廊下の黒光り　早崎　泰江
青田渡る風も同行遍路道　木村茂登子
音もなく白睡蓮に風渡る　吉成美代子
鮎釣や吹き渡る風親父かも　芝宮須磨子
音もなく白睡蓮に風渡る　吉成美代子
飛石に雨染渡る暮の冬　赤座　典子
江戸を知る隅田の川の橋渡る　遠藤　実
海渡る黄砂に楯の何もなし　鈴木多枝子
六月の緑の重さ渡る風　木村茂登子
池渡る風の涼しく友を待つ　森　理和
秋の雨子と渡る夜の歩道橋　田中　藤穂
雁渡る高き山より白くなる　東　亜未
着ぶくれて渡る歩道で躓ける　芝宮須磨子
七草の箸を斜めに日渡る　佐藤　恭子
霧笛橋から残るみかんへ蝶渡る　篠田　純子
夜釣人板一枚の橋渡る　鎌倉喜久恵
ほととぎす谺は青く峡渡る　渡邉　友七
晴渡る畝に残れる霜の粒　赤座　典子
浮雲や枯葦に日の照り渡る　田中　藤穂
冴返る渡る人なき歩道橋　木村茂登子
軽業とおぼしき橋を渡る初夏　佐藤　恭子
蟻屍蟻引き渡る蟻の橋　森　理和
黒南風や帽子おさへて橋渡る　竹内　弘子
深呼吸水面を渡る若葉風　森　理和
由布島まで牛曳き渡る春の海　吉成美代子
舞殿へ朱の橋渡る青葉風　田中　藤穂
爽やかに舎人公園風渡る　須賀　敏子
左右見て赤信号を渡る自転車　佐藤　恭子
見霽かす新緑の海風渡る　斉藤　裕子
老鶯やコロラトゥーラの澄渡る　赤座　典子

短日や五時のチャイムも冴え渡る　斉藤　裕子
初雪や上枝下枝と降り渡る　佐藤　恭子
名月や橋を渡ると橋消ゆる　佐藤　喜孝
高橋を渡る背中の花こぼる　佐藤　恭子
橋殿をためらひ渡る晩霞かな　佐藤　恭子
澄み渡る風の中にも神無月　秋川　泉
山鳩と渡る橋から夕日かな　佐藤　恭子
飛砂の海を渡るや冬の果　大日向幸江
行き渡る風は皇居や花八分　黒澤　佳子
晴れ渡る海辺に並ぶ都鳥　秋川　泉
日は渡るさきざきにある冬の花　佐藤　喜孝
料峭や真珠館へと廊渡る　森　なほ子
照り渡るスーパームーン若葉冷　森　なほ子
絵の中のとどろき渡る嘘かな　秋川　泉
長い橋渡る天より蝉の声　亀田虎童子

罠

逃水や振り込め詐欺の声の罠　遠藤　実
仕かけしを誰にもいはず兎罠　定梶じょう
罠かけて来たり返り見山眠る　定梶じょう

輪投

秋祭初の輪投げは残念賞　赤座　典子

侘

鉢植の木犀にほふ侘び住ぬ　山荘　慶子
侘び寂びを知ってか知らずか今年竹　河合　笑子
足濡るることの侘びしさ谿もみぢ　竹内　弘子
北狐夏毛侘しく横切れり　須賀　敏子
待ち侘し桜前線動き出す　森山のりこ
待ち侘びて待ち侘びて梅満開に　斉藤　裕子

詫び

代筆を詫びる恩師の年賀状　赤座　典子
ご無沙汰を詫びるここちの青田風　早崎　泰江
若き不機嫌いま詫びてをり萩の花　斉藤　裕子
人込にぶつかり詫びる年の暮　長崎　桂子
連日の遅配の詫び状雪垂　赤座　典子
詫びるよに告げる再発額の花　斉藤　裕子
遠くより詫び状の来る春の雷　秋川　泉

和服

侘助やときには和服着てみたし　関口　ゆき
冬紅葉和服婦人の裾さばき　長崎　桂子
更衣和服リメーク母を着る　須賀　敏子
蓮の実が飛んで和服の父のこと　中川句寿夫
花椿和服姿のモデルかな　須賀　敏子
和服著てゆくところなし亀鳴けり　竹内　弘子
初参り和服の若きカップルら　田中　藤穂

和洋

和洋折衷日本列島冬に入る　藤野　寿子

藁

冬牡丹敷藁に来し雀二羽　芝　尚子
一八をいただく家や藁庇　鎌倉喜久恵
藁灰の仕上げ拙き名残茶事　森　理和
軒の巣や藁ぶらさげて燕待つ　佐藤　喜孝
藁買ひの荷を積みいそぐ遠時雨　芝宮須磨子
軒瓦巣藁はみだし春夕焼　河合　笑子
稲藁で縛られてをる秋野菜　関口　ゆき
藁売ってすこしく富む夜天の川　後藤　志づ
犬走る藁の匂ひの刈田かな　森　理和
藁帽子かぶりて楚々と冬牡丹　長崎　桂子
穐田に藁けちらして鶏あそぶ　篠田　純子
どんど飾る稲藁被す松竹に　堀内　一郎
竹弾け藁の火の粉やどんど燃ゆ　佐藤　恭子
藁の火を起して土佐の初鰹　芝　尚子
秋風のごんごん溜る藁の家　堀内　一郎
山並や崩れはじめし藁ぼっち　大日向幸江
秋日濃く藁焼く煙の香ばしく　堀内　一郎
一束の藁に雀の冬籠　井上　石動
地下道に藁の香広ぐ鋤売　大日向幸江
涼しさや木・紙・藁の家に入り　赤座　典子
森　なほ子

笑ひ

小鳥くる赤子すやすや胞衣笑ひ　森　理和
小鳥来る老いてますます笑ひぐせ　芝　尚子
龍の玉鏡の顔のうすわらひ　森　理和
冬うらら道行く人の莫迦わらひ　鎌倉喜久恵
梟のわらひて昼をやりすごす　佐藤　喜孝
自分史に泣き笑ひして花見膳　芝宮須磨子
生垣や赤く芽吹きて皆笑ひ　河合　笑子
信濃路に笑ひくずれし通草かな　関口　ゆき
鳩の恋鬼子母の神のうす笑ひ　後藤　志づ
石人のうすき笑ひや初時雨　後藤　志づ
身に入むや受話器の奥の笑ひ声　森　理和
泣き笑ひ千鳥足あり酔芙蓉　長崎　桂子
笑ひ皺ばかり増えけり初鏡　篠田　純子
雪女すれちがふとき笑ひけり　堀内　一郎
名月や闇にうかびし子のわらひ　佐藤　恭子
笑ひ合ふいびつな記憶冬隣　芝　尚子
甲州市笛吹市山笑ひけり　堀内　一郎
春夕べ遺影笑ひてかなしまず　堀内　一郎
思ひきり笑ひたくなる初映画　須賀　敏子
笑ひ声ひとり加はり年の暮　斉藤　裕子
上向いてみな笑ひをり犬ふぐり　竹内　弘子
雛をさめ翁と媼わらひしまま　長崎　桂子
笑ひ以て法話の尼僧盆の寺　堀内　一郎
笑ひ声絶えて久しき夜長なる

秋の蚊を打ちて豪傑わらひせる　竹内　弘子
陸奥は含み笑ひの四月かな　斉藤　裕子
梅雨晴間老どち集ひ高笑ひ　芝宮須磨子
笑ひ声聞こえる写真水鉄砲　斉藤　裕子
コスモスのさざめく笑ひ風一揆　渡邉　友七
仮装の子ニッと笑ひて踊りけり　東　亜未
羽根つきのをみなの笑ひ響きけり　森　理和
ころころと笑ひし頃の桜貝　赤座　典子
桜餅見え透く嘘を笑ひけり　田中　藤穂
笑ひ顔だけ残って二月尽　堀内　一郎
携帯の高笑ひに鴨泳ぎ寄る　赤座　典子
初芝居笑ひ涙の小劇場　赤座　典子
手を上げて眼の笑ひをる白マスク　田中　藤穂
残酷に西瓜を割って笑ひ合ふ　大日向幸江
笑ひ声親子らしきや夏木立　長崎　桂子
子ら帰る折紙の鶴福笑ひ　須賀　敏子
初笑ひ初泣きもあり大家族　篠田　純子
窓若葉新居に笑ひ声の満つ　田中　藤穂
笑ひ声時時漏れる溝浚　長崎　桂子
笑ひ合ふ鶯餅の青きなこ　竹内　弘子
花筵より若やぎし笑ひ声　田中　藤穂
蚊遣香ひとり笑ひのテレビジョン　佐藤　喜孝
職人のかたき笑ひの十二月　佐藤　恭子
身をかすめわらひ上戸の紋黄蝶　佐藤　喜孝
水羊羹顔映してはわらひこげ　佐藤　恭子
嘆き悔い笑ひし友や額の花　長崎　桂子
秋茄子の大豊作に泣き笑ひ　大日向幸江
キャンパスに弾ける笑ひ秋高し　森　なほ子
思ひ出し笑ひの吐息うららけし　篠田　大佳
花の雨童の影の笑ひけり　篠田　純子
青空にハンカチの花笑ひをり

笑ふ

秋風や笑ふほかなし老いに老い　芝　尚子
蘭根分け明日に残して山笑ふ　河合　笑子
泣き顔で笑ふをみなや年の酒　堀内　一郎
天辺で鴉も嗤ふ夏休　佐藤　恭子
烏賊を干す島の女は歯で笑ふ　後藤　志づ
泣くも笑ふ同じ顔きりぎりす　堀内　一郎
娘孫曾孫と笑ふ花八つ手　森　理和
携帯電話泣くも笑ふも年送る　堀内一郎
空蝉や笑ふも泣くもできず居る　東　亜未
啄木鳥笑ふたんこぶ赤く青くなる　佐藤　恭子
こゑだして笑ふことから秋思やや　芝　尚子
極月や騙され笑ふ太郎冠者　斉藤　裕子
あるがまま毛虫も笑ふ樹木園　堀内　一郎
母の日やをとこは笑ふこともなし

打ち解けて新妻笑ふお正月　斉藤　裕子
白ぼたん赤子は眠りつつ笑ふ　芝　尚子
茶を摘むや姉と弟の笑ふ声　斉藤　裕子
春光に裳階のリズム塔笑ふ　篠田　純子
老若の裸像が笑ふ泥湯殿　斉藤　裕子
抱いてゐて嬰よく笑ふ秋日和　田中　藤穂
仲良しが寿司屋で笑ふ小六月　篠田　純子
貸ボート父が笑へば子が笑ふ　斉藤　裕子
草引くは想定外と虫嗤ふ　佐藤　喜孝
贋物の円空わらふ臀咕かな　田中　藤穂
生りすぎのゴーヤをもらふ風笑ふ　田中　藤穂
瑛菜0才抱かれて笑ふお正月　篠田　純子
あにおとと草虱付けよく笑ふ　井上　石動
竈猫わらふ木喰仏は煤　田中　藤穂
会釈してマスクの人の眼が笑ふ　秋川　泉
カラカラと笑ふ女ら半夏生　七郎衛門吉保
根来寺の笑ふ如来や豊の秋　篠田　純子
葉山の道ビキニのひとの笑ふこゑ　長崎　桂子
お喋りと笑ふ少女等スイトピー　田中　藤穂
紫陽花に触れては笑ふあんよの子　佐藤　恭子
異国語に合はせ笑ふ子夏の街　大日向幸江
健康器使ひし吾に月笑ふ　篠田　純子
園長の笑顔に笑ふ運動会

南瓜ランタン三角の眼は何笑ふ　森　なほ子

笑へ

貸ボート父が笑へば子が笑ふ　篠田　純子
笑へ笑へまだ生きてゐる秋の雲　斉藤　裕子
どん底でも笑へてゐるよ赤まんま　斉藤　裕子
からからと母は笑へり猫じゃらし　井上　石動
ゑのころと猫じゃれてをり笑へ得り

童

花の昼さくらいろして童かな　長崎　桂子
童等は両手ひろげて落花かな　芝宮須磨子
ペンペン草手折り童にもどりをり　七郎衛門吉保
秋の蚊の童にとまり叩かれず　秋川　泉
門札を換えて早や逃げ夏童　篠田　大佳
散りつもる花に埋もれて泣く童
花の雨童の影の笑ひけり

割箸

割箸の六膳の密ちゃんこ鍋　大日向幸江

悪

妹も酒ぐせ悪くクリスマス　堀内　一郎
父親の居場所が悪い晩夏かな　篠田　大佳
悪ぢゑも時に猿知恵五月雨るる　佐藤　恭子
意地悪をされてるやうな秋暑し　須賀　敏子
ゐのこづち悪さしたこと見破られ　鈴木多枝子

一村の二寺の仲悪る営巣期　定梶じょう
元旦の計に少しの悪だくみ　木村茂登子
悪き夢見ぬ流感や有難き　赤座　典子
悪い子も良い子になってさくらんぼ　赤座　典子
くきくきと機嫌の悪い露草の　大日向幸江
古里の夏蜜柑着く見端悪し　石森　理和

我（われ）

雪の朝我を目掛けて鳩百羽　森　理和
おぼろ月回り道して我が家まで　河合　笑子
青春の君とわれ居し春火鉢　田中　藤穂
ころりころりわれに寄りきし恋の猫　芝　尚子
黒猫に惜春我も歩を返す　後藤　志づ
大枯野我を攫えよ鳶の笛　森　理和
われ八十大くさめして恥ずかしや　芝　尚子
年新た英文メール我にあり　須賀　敏子
わが声にわれのおどろく冬の居間　田中　藤穂
目を開くわれ虚か実か日脚伸ぶ　東　亜未
日の下に百足虫とわれと狼狽す　竹内　弘子
曼珠沙華濡れぬところにわれはをり　佐藤　喜孝
諍ひの一因はわれ遠花火　篠田　純子
分け入りて我忘れさす蝉しぐれ　鈴木多枝子
吊されし秋灯客とわれとの間　高橋　信佑
箱庭やいまでもわれは天動説　佐藤　喜孝

霍乱の我色白に夜の鏡　篠田　純子
君がもつ我にもあらむ天の川　森　理和
墓守もわれも老いけり曼珠沙華　鎌倉喜久恵
竜の玉見てゐるらしき我の老　鈴木多枝子
われとわが歯ざはりを聴く芋茎食む　竹内　弘子
つぶやきてわれ亡者めく春の鴨　田中　藤穂
じいつとする守宮が先に我捕らふ　森　理和
象は草ライオン肉食我氷菓　東　亜未
打水を過るまでわれ影であり　佐藤　喜孝
雪椿われに寝首のひとつあり　佐藤　喜孝
枯野星つぶやくわれのひとりの刻　渡邉　友七
霜柱我とわが身をしかと踏む　鈴木多枝子
みどりの日戦禍の記憶われにあり　木村茂登子
空襲の母に掴まりゐるはわれ　佐藤　喜孝
われわれは進化の途中赦し給へ　佐藤　喜孝
駅頭に栗売る媼われを見る　田中　藤穂
天候もわれもせはしく猫柳　芝　尚子
新緑や吸ひこまれゆく犬とわれ　山荘　慶子
賀客あり饒舌のわれありにけり　芝　尚子
梅雨鴉われを弱気の虫と知る　竹内　弘子
揚羽蝶付かず離れずわれとゐる　長崎　桂子
小春日や羽根なき我は杖を持ち　芝　尚子
釣瓶落し別人の我立つやうな　芝　尚子

嫁に映ゆ我若き日の春着かな　斉藤　裕子
春の雪今日の主役の我微熱　森　理和
初句会われ天とせり「はい寿子」　森　理和
造幣局の桜に我を忘れけり　赤座　典子
しばらくは我も魚群に梅雨館　森山のりこ
われ思ふゆゑに秋霖トタン打つ　定梶じょう
初日の出土手ゆく我の長き影　山荘　慶子
万緑やわれにも未来あるごとし　田中　藤穂
横たはるわれ魚めく梅雨の底　佐藤　喜孝
來世も前世も暮春われはゐず　井上　石動
佳品非佳品なべて我等が文化祭　定梶じょう
無辜われら囲ふ焚火の竹が爆ず　赤座　典子
我走り母は歩くと春の夢　山荘　慶子
若葉風後に先にと犬とわれ　斉藤　裕子
吾を憐れむ我在りて哀しちちろ虫　田中　藤穂
われのみの記憶にたわわ小判草　石森　理和
西瓜割り居合はす我もご相伴　佐藤　喜孝
われより先はらわたのあり秋の風　田中　藤穂
綿虫にわれもまぎれてゆくやうな　石森　理和
糖尿の我も少々千歳飴　須賀　敏子
会釈するマスクの我を訝しげ　田中　藤穂
臘八会われにはまだと開戦日　石森　理和
今年竹ずんずんずんと我ひとり　茄子の紺きりりと我にめげるなと　赤座　典子
銀木犀われの老ゆれば子も老ゆる　佐藤　竹僊
われもまた師走の歩幅日本橋　篠田　純子

湾

初空の細身の富士や駿河湾　松本　米子
潜り戸を押せば春光相模湾　鎌倉喜久恵
冬かもめ軍艦の影湾になし　早崎　泰江
こがらしが小さき湾につきささる　鎌倉喜久恵
鳥羽湾の松鮮しき冬の雨　長崎　桂子
暖流の湾の落日寒たひら　長崎　桂子
真珠湾声まで日焼してかへる　堀内　一郎
真珠湾春愁しろく横たはる　堀内　一郎
一湾を海月の泳ぐうす月夜　田中　藤穂
密柑山背負ひ一湾照りこもる　渡邉　友七
水温む潮のぶつかる湾の口　長崎　桂子
台湾バナナよくやってゐるとおもふ　竹内　弘子
日差来て湾一望のきらめけり　長崎　桂子
湾近く裸木二・三逞しき　長崎　桂子
春暁の湾に収まるクルーズ船　赤座　典子
夏の湾美し平ら大鳥居　長崎　桂子
東京湾納涼船浴衣ダンサーズの腰つき　篠田　純子
伊勢湾の絵画の展示卯浪かな　長崎　桂子
九十九湾海月を分けて船進む　田中　藤穂

ハロン湾墨を零して大霞　七郎衛門吉保
ハロン湾拳骨もあり岩朧　七郎衛門吉保
台風12号東京湾19水門閉鎖　篠田　純子
陸奥湾に二重にかかる朝の虹　秋川　泉
ニースなる天使の湾に冬茜　赤座　典子
幾万の貝を抱きて春の湾　森　なほ子
紀伊湾を橙色に秋夕日　七郎衛門吉保
銅鑼灣旅立つ船や春の波　七郎衛門吉保
一灣をわたりきるまで鴈の棹　佐藤　喜孝

椀

雑煮椀味良くなれと蓋をする　松村美智子
蕗の薹緑広がる椀の中　須賀　敏子
旧懐やとろりと熱き治部煮椀　田中　藤穂
霜夜しんしん大椀に盛る薩摩汁　田中　藤穂
厳寒の海から椀へ布海苔かな　森　理和
喜びの席蛤のすまし椀　芝　尚子
留学の子の椀余し雛祭　斉藤　裕子
雑煮椀夫の椀にも吸口を　森山のりこ
茜雲七草粥の椀二つ　山荘　慶子
手に熱し春筍の煮物椀　東　亜未
聖餐のごと一椀の風邪の粥　竹内　弘子
あつあつを吹く大椀の冬瓜汁　田中　藤穂
聖餐のごと一椀の風邪の粥　竹内　弘子
海山の幸がよりそふ雑煮椀　木村茂登子
鱧椀の冷やしたるよし茶懐石　竹内　弘子
具を増やし息災願ふ雑煮椀　長崎　桂子

碗

釜の飯こそげ一碗秋隣　後藤　志づ
秋の昼布巾の下の箸茶碗　佐藤　喜孝
それぞれの飯碗替る年の暮　赤座　典子
恋猫と仏の飯と茶碗酒　後藤　志づ
新樹光百円ショップに鍋や碗　芝宮須磨子
夜まはりに差入れありし茶碗酒　芝宮須磨子
蟲の夜の六つ重ねし飯茶碗　佐藤　喜孝
測るべし茶碗豆腐の扁平率　定梶じょう
茶碗から茶わんへ納豆の糸初秋　堀内　一郎
暑気あたり戛戛洗ふ飯茶碗　佐藤　恭子
秋彼岸銘は舞衣萩茶碗　赤座　典子
こぼれ梅茶碗持つ手のおぼつかな　芝　尚子
気に入りの白磁の茶碗新茶汲む　須賀　敏子
初釜や金銀茶碗有難し　森山のりこ
志野茶碗しづしづ点前雛の部屋　長崎　桂子
八重紅梅碗の熱湯くるくると　佐藤　喜孝
梅雨寒や志野焼茶碗愛で啜る　長崎　桂子
正倉院写し茶碗に名残りの茶　七郎衛門吉保
十二月紅茶を汲める抹茶碗　七郎衛門吉保

あとがき

あをキーワード辞典

あをキーワード辞典が終結した。いつから始めたのか調べたが、知っても益にもならないのでやめた。あい年月を要したやうだ。「わが」「われ」「私」「わたし」などに魅力のある句が多かった印象。俳句は一人称といふことがはっきりと色濃く出るからだらう。さて、終わったら次は何にしやう。良い考へがあればお知らせを。

短文のお願ひ　題「パン」

「千穂はパンが好きだった。窯から出されたばかりのほかほかの食パンはバターもジャムも必要ないくらいおいしいものだ。しかし、」（「みどり色の記憶」あさのあつこ）

私は引っ越しの条件に近くにスーパーがあること、をアパマンショップにお願ひした。普通の人なら歩いて一分もかからないところにある。スーパーには何種類かのメーカーの食パンが並んでゐる。スーパー内でもパン屋さんが出店して焼いてもゐる。どれもトーストしないと喉を通らないぐらい。私は焼かないで食べたい。スマホに向かって「近所のパン屋さん」と呟いてみる。いくつか印のついた地図が出てきた。さっそく近場の店を地図を頼りに出かけた。地図の印のところを二回も通ったが、パン屋がない。閉店してしまったかも。日を改めてもう少し遠いところへ。あった。食パンが一斤だけ残ってゐた。ここのパンが気にいった。耳も皮もおいしい。何回か行ったが、休業であったり売切れてゐたりとうまくいかない。行かないところに惹き付けられるのか結構遠くまで通ってゐる。食パン以外は買はない。（喜孝）

二〇二三年九月号
発行日　八月二十一日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電　話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番 018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）